

## ワクチンの種類と特徴

予防接種で使うワクチンには、生ワクチン、不活化ワクチンの2種類があります。

### ●生ワクチン

生ワクチンは生きた細菌やウイルスの毒性を弱めたもので、これを接種することによってその病気にかかった場合と同じように抵抗力(免疫)ができます。麻しん風しん混合ワクチン(MR)、麻しんワクチン、風しんワクチン、BCG、おたふくかぜワクチン、水痘(水ぼうそう)ワクチン、ロタウイルスワクチンがこれに当たります。

接種後から体内で毒性を弱めた細菌やウイルスの増殖がはじまることから、それぞれのワクチンの性質に応じて、発熱や発疹の軽い症状がでることがあります。十分な抵抗力(免疫)ができるのに約1ヶ月が必要です。

### ●不活化ワクチン

不活化ワクチンは、細菌やウイルスを殺し抵抗力(免疫)をつくるのに必要な成分を取り出して毒性をなくしてつくったものです。百日せきジフテリア破傷風不活化ポリオ混合ワクチン(DPT-I、PV)、百日せきジフテリア破傷風混合ワクチン(DPT)、ジフテリア破傷風混合ワクチン(DT)、ポリオワクチン(IPV)、日本脳炎ワクチン、破傷風ワクチン(T)、季節性インフルエンザワクチン、Hibワクチン、小児の肺炎球菌感染症ワクチン、ヒトパピローマウイルス感染症ワクチンがこれに当たります。

この場合、体内で細菌やウイルスは増殖しないため、数回接種することによって抵抗力(免疫)ができます。一定の間隔で2~3回接種し、最小限必要な抵抗力(基礎免疫)ができたあと、約1年後に追加接種をして十分な抵抗力(免疫)ができることとなります。

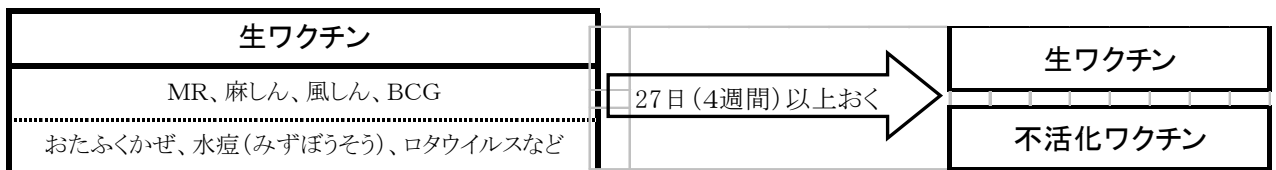
しかし、しばらくすると少しずつ抵抗力(免疫)が減ってしまいますので、長期に抵抗力(免疫)を保つためにはそれぞれのワクチンの性質に応じて一定の間隔で追加接種が必要です。

## 異なった種類のワクチンを接種する場合の間隔

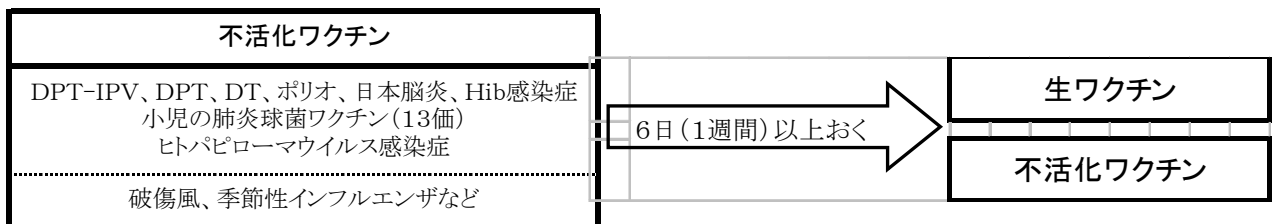
予防接種で使うワクチンには、生ワクチンと不活化ワクチンがあり、異なった種類のワクチンを接種する場合に間隔を守ることが必要です。

異なった種類のワクチンを特に急いで接種する必要がある場合は、医師に相談してください。

なお、同じ種類のワクチンを複数回接種する場合には、それぞれ定められた間隔があるので、間違えないようにしてください。



(生ワクチンを接種した日の翌日から起算して、別の種類の予防接種を行う日までの間隔は、27日以上おく)



(不活化ワクチンを接種した日の翌日から起算して、別の種類の予防接種を行う日までの間隔は、6日以上おく)